

武装する敬語（2）

—敬語イデオロギーと目下の応酬—

尾 鼻 靖 子

I はじめに

本稿では、敬語に対して社会が持つイデオロギー的信条を利用することによって、敬語の使用が、自己主張や相手への挑戦を可能にしたり、相手に有無を言わせないあるいは相手からの反撃を阻止する役割を担う例を考察する。その場合、敬語は言語的武装の役目を担うというのが本稿の主張である。尾鼻（2020）におけるアイロニーの考察においても、敬語アイロニーが話者の言語的武装の機能を果たすと述べたが、それは、敬語が表面上社会的規範（例：目上に対して敬語を使用する）をなぞっているが故に、相手が反撃することができない状況を作るからであると説明した。そして、そこには社会が持つ敬語へのイデオロギー的信条（ideological beliefs）が底辺にあることも指摘した。本稿では、そのイデオロギーとは何か、その社会的影響はどういうものかを明確にし、敬語の武装的機能にどのように繋がるのかを明らかにしたい。

「敬語」とはその名称のごとく「人を敬う言葉」として日本語の一部として受け入れられている。しかし、厳密には人を敬う言葉そのものが日本語に存在しているというわけではない。つまり、敬語は、（敬うという）意味を持つ独自の言語単位として日本語の言語体系に存在しているのではない。ストラテジーを工夫して構築した（意味を持つ）発話に、honorific markings を施した言語形式を習慣的に「敬語」と呼んでいるだけである（Obana, 2017, 2019）。

敬語が意味（conceptual meaning）のある言語単位ではなく markings であるため、敬語はいわゆるポライトネス・ストラテジー（Cf. Brown & Levinson, 1987）とは語用論的機能が異なることから、Brown（2011: 259）は、前者を“indexical politeness”と名付け、後者を“modulation politeness”と名付けて、両者を区別すべきであると主張している。つまり、敬語は、社会的規範として上下関係や親疎の区別を表したり、話者の置かれている場面が公共であることを記したりする「指標」（index）であり、敬語の使用によって話者が相手との関係を適切に認識していることを伝える機能を持つ。一方、ストラテジーによるポライトネスは、相手と関わり合いがある状況下で、円滑にコミュニケーションを進めてゴール（依頼、提案、交渉など）にたどり着くための方策であって、話者の発話の内

容がポライトネスの判断基準となる。むろん、ストラテジー全てがコミュニケーションのゴールに向かうわけではない。人間関係を考慮したストラテジーもあるが¹⁾、概ね言語におけるストラテジーは状況に適應する発話の内容が問われる言語ツールであるといえよう。

敬語が敬意を表す言葉であるという社会的通年も短絡的で誤解を招きやすい。発話の「環境」（社会的関係、発話の状況、場面や対話の流れなど、発話を取りまく様々なコンテキストの要素）を考慮した上で、敬語が適切に使用されることで、ポライトネスと判断されるのであって、敬語そのものにポライトネスが内在しているわけではない。これはどの言語形式にもあてはまり、例えば「ありがとう」という言葉にも「感謝の意」が内在しているのではなく、その発話の「環境」と照合してはじめて「感謝の意」を示すポライトネスであると判断される社会的規範がバックボーンとして存在している（厳密には存在していると社会全体で信じている²⁾）から、習慣的に「ありがとう」という発話を使用しているのである。相手の失敗に対して「いやあ、そんなへまをしてくれてありがとう」と発話すれば、それは「感謝」ではなく相手の失敗を間接的に批判する「皮肉」の意味としてしか解釈できないのは、「感謝」を表す際の社会的規範条件（自分にとって利益をもたらしてくれたという条件）から外れた状況下だからである。

同じように、敬語という言語体系に敬意が内在しているわけではない。だから、敬語を取り巻く「環境」によっては、敬語使用が「敬意」にも「皮肉」にも「侮辱」にもなり得るのである。本稿では敬語に対して社会が持つイデオロギー的信条（以下、「敬語イデオロギー」と略す）が逆手に利用されることで敬語が武装的機能を持つ現象を考察する。そこで、次節では、言語のイデオロギーに関する先行研究に触れ、さらに敬語イデオロギーとは何であるかを明らかにしたい。第3節では、敬語イデオロギーがどのように利用されて、「敬意」以外の意味をもたらすのかを、例を挙げながら検討する。対話の例は、ドラマや映画などから抽出したもので、どの発話の「環境」が敬語使用に関わっているのかが明確になっている。敬語の多彩な意味合いが鑑賞者に伝わるように工夫されているからであろう。

II 言語イデオロギーと敬語

1. 言語イデオロギーの定義

イデオロギーという概念は Silverstein (1979: 193) によれば、“sets of beliefs about language articulated by users as a rationalization or justification of perceived language

1) 例えば、Holmes and Stubbe (2003) は、上司と交渉する際に目下がためらいの言葉や言いさし文を用いたりするのは、相手が目上であることを認識している印であると説明している。また、Locher (2004) は、目上が決定を下す際には、相手への考慮なく断言的な発言をするという報告をしている。

2) イデオロギーと同じく、社会的規範 (social norms) も belief であるからである。

and use”と定義づけられている。言語の様式、構造、使用を一定の方向に正当化したり、あるいは合理化したりすることによって、それが社会に浸透し、そのうちその社会全体の信条として確立するというのである。Obana (2021: 93) はさらに、言語イデオロギーは社会全体を動かす動機・動力ともなると定義している (“the belief/idea of affairs [e.g. linguistic use] that becomes a motivating force for society”)。信条であるから、Seargeant (2009: 346) は、イデオロギーには「言語の象徴的な価値」 (“symbolic value of language”) があると述べている。また、我々の社会的活動もその価値によって統制され、精神的にもその価値の枠にはめられるようにもなる (“a mental frame”: Wright & Hailu, 1988: 177)。つまり、言語は、情報伝達的手段として機能するばかりではなく、その言語のイデオロギーの持つ象徴的な価値が、我々の社会的活動を方向づけ、調整、規制するのである。

我々は普段自分の意思を伝えるために言語を自由に操っていると信じているが、実は言語は、政治力や優勢な権力によって一方方向に制度化されることが多い (“asymmetrical relations of power”: Thompson, 1987: 518)。例えば、多言語国家で、ある言語が有利であるとか (インドにおける英語、南アメリカにおけるスペイン語)、言語の標準化を図るとか (イギリスにおける英語の RP、日本語の共通語、ドイツ語の Hochdeutsch など)、元々は言語に優劣があったわけでもないはずが、政治的、経済的な力が加わることで、言語の価値を社会的に決定づけてきたのである。そして、確立したイデオロギーが、我々がどのように考えて行動するかを決定し、そしてそれを繰り返し行動にすることで規則化するようになる。これがいわゆる social practice 「社会習慣」で、社会で当たり前のこととして存在するようになるのである。Rumsey (1990) がイデオロギーを “common sense notion” と定義づけた所以である。このように習慣化した行動は、Bourdieu (1977) が命名した *habitus* ともいえる。Bourdieu は、*habitus* を、“dispositions shaped by past experiences and systems, which consequently contribute to shaping current practices” (Bourdieu 1984: 170) と定義づけているが、経験によって習得した結果得られる現実の行動傾向として捉えている点で、上記の social practice や common sense と同義である。

しかしながら、すべての common sense/social practice がイデオロギーの範疇にあるわけではない。前者は、日常のインターアクションにおける具体的な習慣である。例えば、挨拶の言葉、前置きの言葉 (例: 「本日はお忙しいところを〜」)、依頼の時の表現 (例: 間接表現) など、社会人として具体的な場面でどのように振る舞うのかという現実的な言語のわきまの体系を示す。一方、言語イデオロギーというのは、抽象的に belief として、心理的に内在化している思想的な傾向があり、組織的に構築されたものではない。それを、van Dijk (1998: 314) は、“the basic axioms of the system of social representations shared by a group” と譬えている。つまり、「社会的価値の公約」というレベルで留まっているのがイデオロギーである。しかし、前述のように、イデオロギーの持つ効力は大き

く、社会生活の行動基盤を司り、我々が意識している以上に我々の言語活動を支配し抑制する威力がある。次に言語イデオロギーのひとつである敬語イデオロギーについて考察する。

2. 敬語イデオロギー

敬語は、八百万の神々を称え、また願い事を訴える言語手段として発達した、と主張したのは春日（1977）及び村上（1977）で、さらに浅田（2014）は、敬語の起源は「祝詞」にあると結論している。原始の敬語は神々に属する言葉であったが、祝詞を奏上するのは神道においては天皇であったから、神々のメッセンジャーとしての天皇にも敬語を使用するようになり、後には身分の上下を区別する言葉として発達する。社会が複雑になるにつれて敬語の様態も変化するが、身分や階層の差を表すという概念は変わりなく、それが江戸時代末まで続く。

明治以降になると、日本が国外に門戸を開き、対外交渉をし、他国を侵略し、戦争を起こすようになると、「対外的日本」という国家的理念が有要となり、憲法、文化、軍隊、教育などあらゆる面において、日本は「近代国民国家日本を永久不変の民族国家」（小山，2011: 274）であると表明しようとする。敬語の統制もその例に漏れず、敬語の社会的意義を規定するようになる。小山（2011: 279-280）によると、当時の国語学者は、「近代日本の創られた儒教的道徳論を駆使して敬語をイデオロギー化し、敬語をもってして、言霊の幸う国である皇国の道徳的、美的な伝統の恒久的な連続性を示す言語的な証左」として位置づけたという。

戦後になると、「国語化」という新しいイデオロギーが社会に浸透するようになる。戦後の民主化の一端として、敬語が身分の上下を表すという象徴を払拭しようと、当時の文部省は1952年、「これからの敬語」という声明文において、これからの敬語は「各人の基本的人格を尊重する相互尊敬の上に立たなければならない」と述べている。敬語使用は上下関係が認められた時に発生するという事実を考えれば、敬語使用は一方方向でしかなく、「相互尊敬」というのは成り立ちにくいと筆者は考えるが、同じように政府の声明文を批判する学者も多い（例：田中，1999；築島，1976 [1973]；蕨谷，2017；渡辺，1994）。例えば、築島（1976 [1973]: 144-146）は社会生活では社会的地位や年齢の差は厳然と存在するものであって、「だれしもこのような上下の関係の網のなかに生きている」とし、敬語は社会的活動における上下の指標であって、政府が唱える個人的人格や個々間の敬意とは別のものであると主張している。しかしながら、民主化が進むにつれて、敬語が身分の上下から社会生活における上下（年齢、社会的地位）という相対的な言語活動に変化したことは否めない。これは Woolard（1998）が提案したイデオロギーを構成する4つの要素（strands）のうちのひとつ、“a direct link to inhabitable positions of power”が功を發したからである。つまり、国家の権力をもってして新たな敬語イデオロギーが確

立されたのである。

相対的な上下関係を表す敬語が社会に浸透するようになると、敬語の定義も変化するようになる。井上 (1999) は現代敬語を「左右敬語」と呼び、入谷 (1978) 及び辻村 (1989) は、「改まり」、また渡辺 (1974) は「品格保持」と定義づけている。サービス業における敬語の過剰な使用などから、宮地 (1983) や大石 (1984) は現代敬語を「商業敬語」と名付け、さらに福島 (2013) は、敬語の使用によって他の人に「自分はこういう人間であるからそのように扱ってほしい」という自己をアピールすると述べている。

戦後の民主化によって敬語は確かに身分の上下という指標を払拭したことは否めないが、では敬語は果たして本当の意味で民主化したのであろうか。身近な例から考察してみよう。敬語は自然に身につく言葉ではなく、大人になるにつれて努力して学ぶ言葉である。社会で働くようになれば、敬語訓練まで受け、マニュアルを覚え、流暢に操れるように練習するのが普通である。敬語の教本や手引きが巷に溢れているのは、我々がいかに敬語に苦勞しているかを示すバロメータとなる。敬語に関する書籍のタイトルによく見かけるキャッチフレーズがある。例えば、

「できる人の敬語」「敬語は最強の戦略」「お客様に好かれる」「社会人の常識」
「一目置かれる」「さすが、と言われる」「仕事の武器」「信頼される社会人のパスポート」

これらの表現は、上記の現代敬語の定義である「改まり」「品格保持」「自己アピール」と相通じるものがあるが、その根本にはある一定の「価値」あるいは「力」がイデオロギー的に存在している。つまり、敬語を上手に駆使できるという「能力」であり、その能力を持つ者が社会の上位を占める、あるいは上位を目指す「指標」として日本社会に浸透している価値であり、社会や経済における力である。つまり、戦前は敬語が身分の上下を証する指標として機能していたのが、戦後はその上下が「能力」や「教養」、そしてそれらの結果としての「社会的地位」の差を証する指標へと変化してきたのである。小山 (2011: 229) はさらに、民主主義の下、「同じ教育 (家庭 / 学校 / 社会教育) を通して、複雑な敬語や、状況 / コンテキストによって敬語を使い分けるコミュニケーション能力を習得」した社会集団は、その能力を習得しなかった他の集団と区別され、「戦後日本の非対称的な社会階層の上層に位置する人々として指標される」と述べている³⁾。Irvine (1998) も、ジャワ語、ウォロフ語 (セネガル地域の言語)、ズール語 (南ア) などの言語における敬語を調べ、社会上層部、社会的権力、エリート層と敬語の密接なつながりについて報告している。

現代敬語の持つ価値は、社会においては上下関係における力と象徴され、文化的にも高

3) しかし一方で、敬語に対する否定的な価値づけを行っているのも、敬語を駆使できる社会の上層部だと小山 (2011: 229-230) は追記している。この理由は、渡辺 (1994: 63) が説明するように、学歴社会で低い層が敬語の使用を強いられるのは当然で、上層部に安定を見出した者は、「敬語意識にある程度のゆとりが生まれ、…日常の敬語意識では『進歩的』ポーズをとることも自由」であるからである。

く評価され⁴⁾、さらに敬語使用者の教養度や社会層をも暗示する。現代社会の上層部とは、学歴社会で勝ち抜いたエリートであり、社会的権威においてはトップの階層に属する。敬語を使用するのは下位層であって（場面によって上下が変化するとしても、である）「下位に位置する者が敬語を使わなければ、つまり、自己の上位にそびえ立つ階層的な社会秩序を尊重する姿勢を示さなければ、程度の差はあれ、なんらかの社会的制裁を覚悟しなければならない」（渡辺, 1994: 63）。渡辺（1994: 120）はさらに、平等に与えられる教育でありながら、「教育社会を貫く原理は階級社会を貫く原理と連結して」おり、「階級社会に内在する抑圧機能は教育社会での競争秩序のなかで正統化され、それにそって人々を調教し、長い時間をかけて彼らを馴化する」とし、学歴社会というイデオロギーが現代敬語のイデオロギー（階層社会の秩序の維持）を作り上げていると主張している。

この論の是非を考察するのは本稿の目的ではないが、敬語イデオロギーが及ぼす影響力は、想像以上に大きいと言わねばならない。それは、上層部から下層部への抑圧というよりは、敬語が上下を表す言語として社会に浸透しているという意味においてである。だから、人との関わりにおいては社会的関係がまず考慮され、敬語使用の有無を決定するというのが我々の「習慣」となっている。その習慣は、敬語イデオロギーが我々の精神に内在化することで定着するのである。

しかしながら、敬語イデオロギーが社会の上層部から下層部への抑圧として常に機能しているのかというと、必ずしもそうではない。筆者は、イデオロギーが思想的な公約である限り法律の条項のような規則のリストでないから、イデオロギーを逆に利用することで、下位の者が上位を動かす動力にもなり、上位に自己主張や挑戦しながらも敬語を盾に取ったりできるのではないかと思う。人間が作るシステムは、他の人間によって逸脱した方法で利用されるのはよくあることである。法律や規定さえも犯罪に利用されるのである。ましてや思想的な公約に留まっているイデオロギーは、信条や意識のレベルでしかなく、その信条を表面上なぞり乍ら逆利用することも可能である。次節では、対話例に基づいて敬語が下位（あるいは弱い立場）の者にとって「抑圧」ではなく「武装」の機能を果たす点を考察する。

Ⅲ 敬語イデオロギーの逆利用：下位から上位への応酬

この節では、ドラマなどに表れる敬語の例を基に、敬語イデオロギーを逆手に利用することで、下位者が上位者に応酬する現象を分析する。そのような現象では、下位者の敬語は、無礼な発言を緩和させたり、あるいは上位者からの反駁を防ぐ盾の役割を担う。

4) 2016年度の文化庁の調査では、回答者の65.1パーセントが、「敬語は日本語の伝統的美を成す」という表述に賛同している。

1. 相手の干渉を拒否する

Hasegawa (2006: 213) は、敬語を突然使うと、“unfriendly, stand-offish or rejecting” という響きがあると述べている。Ikuta (1983) は、ポライトネスというのは、社会的・心理的に距離を取るのが基本であると主張しているが、敬語の場合も距離を適切に取ることが規範的には敬意を表すことになる。しかし一方で、その「距離」を話者が利用すれば、話者が遠くにスタンスを取ることで相手を拒絶したり、干渉を避ける役割を果たすこともある。

例 (1) は、ドラマシリーズ「相棒」において伊丹が杉下に向かって発言している様子を示している。伊丹は杉下より警視庁においてはランクが下であるので、普段、「です・ます」を使うことで上下の差を表しているが、時折レベルの高い敬語を使うことがある。そこに伊丹の敬意以外の意向が表れているのである。

(1) 伊丹：お説、ありがたく拝聴いたしましたので、これ以降は我々におまかせください。

(『相棒』 シーズン11、第2話)

殺人現場（昔のレコードなどのコレクションを得る店）で伊丹たちがこれは強盗の仕業だと言っている時に、杉下が強盗であるのに価値のある品物には手をつけていない、犯人はもっと身近にいる人ではないかと推理する。捜査1課の伊丹としては、捜査に関係しない特命係の杉下にそのようなことを言われるのは面目が潰れるだけでなく、杉下の推理が理にかなっているだけにくやしい思いをする。

「お説」「ありがたく」「拝聴いたしました」という言葉は、皮肉⁵⁾である。「説」に「お」を付けることで、相手の発言を揶揄し、ありがたいと思っていないのに「ありがたく」と言い、拝聴したわけではないのに「拝聴いたしました」と最高レベルの敬語を使うことで、杉下を皮肉っている。さらに「我々におまかせください」と拒絶の響きを持たせて発言している。敬語を駆使しているが、相手への敬意はまったく感じられない。

例 (1) の敬語そのものは上位の者に敬語を使うという規範をなぞっている。皮肉すら間接的な批判なので相手が反駁することを阻止する力があるが、そこに敬語が使われているとさらに反撃しにくい。さらに「こっちにまかせろ」と、命令的であり相手の干渉を拒むストラテジーを目下が目上に向かって発言できるのも敬語で包んでいるからである。これは、目上にとっては目下から敬語を受け取ることが社会的に第一義になっているからで、発話の内容が第二義になってることを示す。

上記のような状況を客観的に眺めると、目下が失礼な発言をしていると判断するであらう

5) Burgers (2011: 190) は、アイロニーを ‘an indirect speech act with a reversal of evaluation’, あるいは ‘an utterance with a literal evaluation that is implicitly contrary to its intended evaluation’ と定義している。つまり、発話の内容と話者が伝えたい意図との間にずれがあるのがアイロニーの特徴である。これを尾鼻 (2020) は、「命題的アイロニー」と名付けている（敬語のアイロニーには、「非命題的アイロニー」もあるのでこのように区別している）。

う。しかし、目下がどのような意見を発していても敬語を使っている限り、目上は聞く態度を続けるのに、目下が敬語使用をやめた途端怒り出すということは現実でもよく起こる。これは筆者が経験したことであるが、ある会議で目上が数人の目下から攻撃されても辛抱強く対応していたが、一人の目下が突然「あなたが～」という言葉を使った途端、感情的になり「目上に向かって、あなたとは何ですか」と叱りつけたことがあった。その目上にとっては、目下から「あなた」と呼ばれるほうが、会議で攻撃されるよりも屈辱的だったのであろう。

ドラマ「半沢直樹（第10話）」においても、似たようなシーンがある。半沢が頭取や管理職の人たちが出席している御前会議で上司の大和田の融資不正を暴いても、大和田は冷静に対応している。しかし、（半沢にとって証人となる）岸川が発言するのを大和田が妨害しようとした時、半沢が大和田に向かって、「今、岸川さんが話しているんだ、黙って聞け」と大声を出す。それに対して、大和田が「何だ、その口のきき方は、私は常務だぞ！常務だっ！」と怒りにまかせて大声を出す。大和田は半沢より地位が遥かに高い。大勢の前で不正を部下に暴かれることには冷静に対応していた上司が、部下の敬語不使用に対しては感情的に反応する。敬語がいかに我々の精神構造に浸透しているかが分かる。Hall (1996: 26) は、イデオロギーを“mental framework”と定義しているが、敬語においてもそのイデオロギーが精神的骨組を確立しているということであろう。

例（2）も相手の干渉を拒絶する態度を示している。ドラマ「相棒」で、杉下が源一に質問をする。源一がその妻の死にかかわっているのではないかと杉下は思い、質問がそのうち殺人に関することになってくる。それまでは、源一は、「ふざけたこと言わないでもらいたい」とか、「病死なんだ」と、敬語を全く使わずにぶっきらぼうに答えていたが、犯罪を犯したのではないかと匂わされた瞬間、

（2）お引き取りください。これ以上、お話することはありませんので。

（『相棒』シーズン7、第19話）

と、レベルの高い敬語でもって対応する。源一は普段でも敬語をある程度使い分けができる人物としてドラマに登場している。杉下が偵察に来たことが迷惑で、最初はぶっきらぼうに答えている。それが敬語不使用に表れているのである。しかし、拒絶をはっきり示す時に敬語を使っている。

警察の調査はある意味「権力」である。しかし、源一は警察に協力して受け答えしているわけだから、善良な市民として義務を果たしているという建前がある間は、敬語をまったく使っていなくとも社会的な制裁あるいは罰を受けることはないであろう。しかし、警察への応答を拒否する時は、権力に対して盾突いていることになる。そこで、例（2）にあるように、敬語を織り交ぜて権力に対して敬意を払うというスタンスを見せながら、拒絶の意思を伝えようとしている。源一の拒絶発言を受けて、杉下はそのまま引き下がっている。敬語が効力を発揮したと言えよう。

2. 挑戦的・批判的態度

ここでは、部下や社会の下層部の者が上司や上層部の者に対して、批判的あるいは挑戦的態度を取る際に敬語を駆使することでその態度を和らげる、あるいは敬語が隠れ蓑になる効果を検討する。次の例は、ドラマ「半沢直樹」から抜粋したものである。浅野支店長の陰謀で、突然東京の本店から小木曾や灰田を含む視察のグループが半沢の銀行支店を訪れ、裁量臨店が開かれ、そこに問題が続出するシーンである。この例(3)の対話の前のシーンでは、半沢たちが揃えた資料がいつのまにか会議の場で消失していることに気づき、半沢たちは一案を講じる。そして当日も資料が消えているので、小木曾が半沢を遣り込めようとする。そこで半沢は小木曾たちに鞆の中身を見せてくれと依頼する。

(3) 半沢：そうですね、私もあなた方を信じたい。ですから、今この場で全員の持ち物を改めさせていただきます。

灰田：何バカなことを言っているんだよ。そんなことをして、もし何も出てこなかったら君はただじゃ済まされないぞ。

半沢：覚悟の上です。

小木曾：実に不愉快だ。君の横暴につきあうつもりはないよ！

渡真利：まったくです。なんという言いがかりだ！いい加減にしろよ、半沢。

灰田：そうだ、渡真利君の言うとおりで。

渡真利：ここまで侮辱されて黙ってられるか！さあ、皆さん、潔白を証明するためにもかばんの中身を見せてやりましょう。やましいところが無ければ何の問題もない。覚悟をしろよ、半沢！

半沢：上等だ。ではお一人ずつ拝見させていただきますようか。

(『半沢直樹』第3話)

例(3)の登場人物、灰田と小木曾は本店の行員で半沢より地位が上である。だから、半沢は丁寧語を使うが、普段の半沢の敬語は低いレベルで留まっている(例えば一重下線を引いた発話)。しかし、例(3)の半沢の最後の発話(二重線の下線部)は、かなりレベルの高い敬語となっている。ちなみに半沢の最後の発話の「上等だ」というのは同僚の渡真利に向かって発しているなので敬語は使われていない。

半沢とその部下たちは、小木曾たちが資料をわざと隠しているのではないかと推察し、会議の前に資料をその日の新聞と一緒に写真を撮っておく。そして予想通り会議の場で資料が消失しているので、荷物を改めさせてほしいと依頼する。この時点で半沢はかなりの確信を持って小木曾たちに挑戦的態度を取っている。それが、最後の行のレベルの高い敬語となって表れている。渡真利が一見小木曾たちの側に立って発話しているように見えるが、実は半沢と仲が良く、ここで半沢が小木曾たちの鞆の中を調べられるよう間接的に協力している。このことも半沢が自信を持って小木曾たちに挑戦的態度で持ち物調べを強要できる方向づけをしている。

半沢の最後の発話は、honorific markings を取り除くと「ひとりずつ見せてもらおうか」と、かなりの強要度の高い内容である。「～てもらう」という言葉は内容が相手にとって不利なものであれば、それは乞う態度（あるいは謙虚さ）からはずれ、強制・強要を増進させる役目を担う。「やめてもらいます」という解雇の宣言、「死んでももらいます」とヤクザが刀を手に言う台詞、それらは相手にとって不都合なものである限り、言葉の上では「乞う」形を取っていても実はかなりの強要、あるいは脅しとなる。その上で、高レベルの敬語化を施した発話は、決して低姿勢の要請ではなく、むしろ高姿勢ですらある。では何故高レベルの敬語が要請の強制度を増加させることができるのであろうか。

Del Villano (2018: 95-96) は、丁寧度の高い発話がかえって上位のランクを印象づけることがあると述べているが、その例として、シェイクスピアの「ハムレット」において、新しい王が摂政たちに非常に丁寧に国の状態を聞いているシーンを挙げている。王が下位の者にそれほど丁寧に話す必要はないのであるが、丁寧さがかえって新しい王の地位（最高ランク）を確実に知らしめる効果があると解説している。そして、丁寧度増加が高姿勢なのか低姿勢なのかを判断する基準は、発話の内容に affection が織り込まれているかどうかで決定すると述べている。王の丁寧表現が王の地位を知らしめると判断されるのは、王の発言に側近への affection が感じられる対話でないからである。この affection を広く解釈すると、相手へのポジティブな感情（好意、敬意、厚意、気遣いなど）と捉えられる。敬語が「敬意」なのか、「否定的態度」なのか、発話の内容及び発話を取り巻く「環境」から推察できることも多いが、敬語を使う話者のほうに相手に対してポジティブな心理状態があるかどうか重要な決め手になる。

例（3）の半沢の敬語は、決して敬う意味もなければ、低姿勢でもない。半沢は、小木曾たちに敵として応対している。だから、このような人間関係で使用される高レベルの敬語は敬意からほど遠く、否定的感情が強調されたと判断される。半沢は小木曾が書類を隠したと確信している。その確信が心理的に半沢を優位に立たせている。その優位の心理がレベルの高い敬語使用に発露しており、それが上位者には「挑戦的態度」として映ることになる。しかし、一方で敬語を上司に対して使用しているので、半沢が言葉の使い方を非難されることなく突き進むことができている。敬語の功名な操作が、話者の思う方向へと導きながら上位からの反撃も阻止する機能を果たしているのである。

次の例は批判的態度を敬語でカムフラージュしている発話である。小説「危険領域 所轄魂」の中で、事件が大きくなるにつれて所轄の刑事たちが県警の対処にもどかしさを感じ、主人公の所轄の葛木が発した言葉が、例（4）である。

（4）葛木：おれたちはどうしたらいい。まだ県警からはご招待が来っていないが。

（『危険領域 所轄魂』 p. 466）

この発話は、県警の眼前で発せられたものではないが、話している相手が葛木の上司である。しかも県警は所轄よりも上位である。だから、このような状況で葛木は県警は何をし

ているんだと直接批判するわけにはいかない。そこで、「ご招待」という敬語を使用することで、葛木の県警への批判的態度を示そうとしているのである。

様々な現場の事件は大抵所轄が見つかる。そして事件の規模に応じて、県警あるいは警視庁が帳場を立てて、合同捜査を行う。合同といっても所轄の刑事たちは、大概上位署の命令通りに動く「足」であり、使い走り（連絡係、弁当の手配など）として利用される。この小説では、葛木は優秀な刑事であり、事件を解決に導くのであるが、組織においては下位である。だから、県警を直接批判するのは、たとえ溜口を聞く直属の上司に向かってでも憚れるので、批判的態度を敬語に込めているのである。

例 (4) の発話は皮肉である。普通は県警が判断して合同捜査の意を宣言し、所轄はそれに従うだけである。県警が捜査に「招待」することはありえない。ここでは「県警からまだ帳場を立てる声が拳がっていない」という苛立ちを「招待」という言葉に込めている（話者の意図と発話の内容が食い違うので、「命題的アイロニー」である）。さらに「ご」という接頭辞 (honorific prefix) を付加することで、アイロニーを強調している⁶⁾。

敬語が駆使できるという能力は、その話者の品格にも通じる。罵倒の言葉で批判をするよりも皮肉と敬語を使って間接的に批判するほうが社会には受け入れられやすい。しかも、アイロニー（特に命題的アイロニー）は、その性質上表面はポジティブな発話であるため、直接の批判内容は発話に出現しないから批判の度合いも軽減されると Kreuz (2020: 107) は述べている。さらに敬語によってあたかも上位の者に敬意を表することで、さらに「批判」はカムフラージュされ、しかも上位者からの反駁を避けることができるという盾の役目も敬語は担っている。

次の例では、頭取と銀行のトップの管理職たちとの会議において、大和田が頭取に挑戦的態度を敬語で覆い隠しながら、追い詰めるように巧妙に話しかけている。半沢は上司の大和田の策略にかかり、窮地に追いやられる。しかし、元々は頭取が半沢にホテルを救うことを依頼したのである。大和田は野心的なバンカーで、いずれは頭取の地位に就きたいと思っている。だから半沢の失敗は、大和田にとっては出世につながるチャンスで、このシーンで頭取に責任のありかを認めさせようとしているのである。

(5) 岸川：半沢次長を指名したのは頭取ご自身じゃないですか！

大和田：黙りなさい！そんなことは頭取も十分承知していることだよ！その上で半沢次長を指名したのには、頭取なりの深いお考えがあつてのことだよ。もちろん、ダメだったときにはすべての責任を取ると、そういう…お覚悟がおありなんですよねえ？頭取。

中野渡：……無論だ。

大和田：よく…分かりました。

6) 命題的アイロニーの場合、敬語はアイロニーの度合いを増加、あるいは強調する機能がある（尾鼻, 2020: 23; Obana, 2021: 121）。

(『半沢直樹』 第9話)

責任のありかを明確にしようとする大和田の発話は、上記でいう affection とは真逆の意図が見える（上司の責任を問う自体不善であろう）。大和田は、粘り気のある声でゆっくりと探るように頭取を見ながら話している。半沢が失敗しそうな状況で大和田は好機到来と思っている。会議の参加者に証人になってもらうかのように、頭取の責任（つまり辞任）を明確にしようとしているのである。大和田の適切な敬語使用は、上位者に対して社会的規範に叶った言語行動である。しかし、それが頭取への挑戦的態度を緩和し、大和田の真の意図をカムフラージュするという役割も果たしている。その証拠に、頭取は、ちょっと迷った感じが一瞬あったが、すぐに「無論だ」と静かにしっかりと応えている。大和田の発言は失礼であるが、敬語によってそれが緩和されているのか、あるいは上位への敬意を表しているという第一義のほうに注意が行くのか、大和田の挑戦的な問いに反駁していない。

IV おわりに：武装する敬語

以上、敬語イデオロギーを逆利用することで、下位者が上位者に対して応酬する例を見てきた。Fairclough (2015 [1989]) 及び Mooney & Evans (2019 [1999]) は、言語と社会との関わりを解明する際に、“power” というキーワードを使っている。この場合の power とは、象徴的な力、価値のことで、その power をもたらすのは、ideology であって、社会に影響力が強い ideology を特に hegemonic ideology (Mooney & Evans, 2019 [1999]: 18) と呼んでいる。さらに、これらの著者は、言語イデオロギーは common sense として社会に浸透しているため、普段我々は気づきにくい、イデオロギーは決して特殊なグループが掲げるスローガン（テロリストの理念など）ではなく、社会に生きる我々が当たり前なこととして受け入れている日常の社会現象として存在していると主張している。

敬語も同じように我々の日常に常識として存在している。だから敬語が言語イデオロギーの一部であるとは普段意識していない。しかし、敬語を使うべき場面で使わない現象を目の当たりにした時はじめて敬語がいかに象徴的価値、力を持って我々の心理に内在しているかを認識する。

敬語イデオロギーの象徴的価値・力は、社会の上位層にとって有利に働くと第2節で述べた。下位の者が敬語を使うのは上位の者に対してであるという現実をしても、敬語の価値は社会の上位層にとって都合のいい言語手段として機能する。しかし、そのイデオロギーを逆に利用することで、敬語の価値を下位層が身にまとう防御の役割に転じることも可能である。そして、敬語という防御手段を用いることで上位者に対して応酬することが可能となる。

横暴な客に対して、店側や旅館側がひたすら低頭して敬語を使ってその場を収めようとする光景を見ることがあるが、それは「お客様は神様です」という謙讓の精神なのであるか（おもてなしの精神は称賛に値するが、横暴な客に対してはどうだろうか）。むしろ神様のように扱うことで客の怒りを抑え、敬語がさらに懐柔しているのではないか。敬語の起源が祝詞にあると言われている。敬語は神々への言葉である。しかし、神々を怖れながらも祝詞を唱えるのは、神々に要求することがあるからである。要求が大きければ大きいほど（災害を起こさないでほしい、ある人を呪ってほしい）敬語も多大となる。それを謹んでお願いしますと逡巡の言葉（かしこみ、かしこみ、と繰り返す）で結ぶ。祝詞は、神の言葉を聞く「聖書」とは違い、神々に訴えるための唱えである。現代敬語も祝詞の中の敬語と同じような機能を維持しているのではないだろうか。

確かに目上に対して適切に敬語を使用するのは礼儀であり、敬語が駆使できることは教養や品格と関連もあるだろう。また、(真の意味で)敬意を持つ相手に敬語を使うことは、美德として受け入れられるであろう。しかし、それも敬語イデオロギーが構築した belief の一部である。一方、他の視点から眺めると、敬語を駆使することがその使い手を社会的制裁に合わぬよう防御する役割を担っていることも否めない。さらに、上位者に挑戦したり批判したりする場合、敬語イデオロギーを利用することで敬語に武装の機能をもたせることも可能である。本稿で挙げた発話例は敬語イデオロギーが必ずしも上位者にとって都合のいい信条ではなく、下位者が逆利用することで上位者に応酬することが可能であることを示している。

参考文献

- 浅田秀子 (2014). 「敬語の原理及び発展の研究」. 東京堂出版.
- Burgers, Christian (2011). Finding irony: An introduction of the verbal irony procedure (VIP). *Metaphor and Symbol*, 26, 186-205.
- Bourdieu, Pierre (1977). *Outline of a Theory of Practice* (translated by R. Nice). Cambridge: Cambridge University Press.
- Bourdieu, Pierre (1984). *A Social Critique of the Judgement of Taste*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Brown, Lucien (2011). *Korean honorifics and politeness in second language learning*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Del Villano, Bianca (2018). *Using the Devil with Courtesy: Shakespeare and the Language of (Im) Politeness*. Berlin: Peter Lang.
- Fairclough, Norman (2015 [1989]). *Language and Power*. London/New York: Routledge (the third edition).
- 福島直恭 (2013). 「幻想の敬語論」 風間書院.

- Hasegawa, Yoko (2006). Embedded soliloquy and affective stances in Japanese. In: Suzuki, Satoko (ed.), *Emotive Communication in Japanese*, pp. 209-29. Amsterdam: John Benjamins.
- Hall, Stuart (1996). The problem of ideology: Marxism without guarantees. In: Morley, David and Chen, Kuan-Hsing (eds.), *Stuart Hall: Critical Dialogues in Cultural Studies*, pp. 25-46. London: Routledge.
- Holmes, Janet and Stubbe, Maria (2003). *Power and Politeness in the Workplace*. London: Longman.
- Ikuta, Shoko (1983). Speech level shift and conversational strategy in Japanese discourse. *Language Science*, 5, 37-53.
- 井上史雄 (1999). 「敬語はこわくない」講談社.
- 入谷敏男 (1978). 『言語心理から見た敬語の問題』北原保雄編「敬語：論集日本語研究9」pp. 187-197. 有精堂.
- Irvine, Judith T. (1998). Ideologies of honorific language. In: Schieffelin, Bambi B., Woolard, Kathryn A. and Kroskrity, Paul V. (eds.), *Language Ideologies: Practice and Theory*, pp. 51-67. New York/Oxford: Oxford University Press.
- 春日和男 (1977). 『敬語の変遷 I』「岩波講座日本語4 敬語」pp. 95-134. 岩波書店.
- 小山亘 (2011). 「近代言語イデオロギー論」三元社.
- Kreuz, Roger (2020). *Irony and Sarcasm*. Cambridge: The MIT Press.
- Locher, Miriam A. (2004). *Power and Politeness in Action*. Berlin/NY: Mouton de Gruyter.
- 宮地裕 (1983). 『敬語をどうとらえるか』「日本語学」第2巻1月号, 4-12.
- Mooney, Annabelle and Evans, Betsy (2019 [1999]). *Language, Society & Power*. London/New York: Routledge (the fifth edition).
- 村上重良 (1977). 「天皇の祭祀」岩波新書.
- Obana, Yasuko (2017). Japanese honorifics re-re-visited. *Journal of Politeness Research*, 13 (2), 4-31.
- Obana, Yasuko (2019). Politeness. In: Hendrich, Patrick and Ohara, Yumiko (eds.), *Routledge Handbook of Japanese Sociolinguistics*, pp. 248-263. London: Routledge.
- 尾鼻靖子 (2020). 『武装する敬語—非命題的アイロニー考察』関西学院大学言語教育研究センター「言語と文化」No. 23, 15-28.
- Obana, Yasuko (2021). *Japanese Politeness: An Enquiry*. London/New York: Routledge.
- 大石初太郎 (1984). 「現代敬語研究」筑摩書房.
- Rumsey, Alan (1990). Wording, meaning and linguistic ideology. *American Anthropologist*, 92 (2), 346-361.
- Seargeant, Philip (2009). Language ideology, language theory, and the regulation of linguistic behaviour. *Language Sciences*, 31, 345-359.
- Silverstein, Michael (1979). Language structure and linguistic ideology. In: Paul R. Clyne, William F. Hanks and Carol L. Hofbaner (eds.), *The Elements: A Parasession on Linguistic Units and Levels*, pp. 193-247. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- 田中克彦 (1999). 『敬語は日本語を世界から閉ざす』月刊「言語」Vol. 28, No. 11, 41-47.
- Thompson, John B. (1987). Language and ideology: A framework for analysis. *Sociological Review*, 35 (3), 516-536.
- 辻村敏樹 (1989). 『待遇表現と日本語教育』「日本語教育」69号, 1-10.
- 築島謙三 (1976 [1973]). 『敬語と社会心理』「敬語講座7：行動の中の敬語」pp. 137-162. 明治書院 (第

2版).

van Dijk, Teun (1998). *Ideology — A Multidisciplinary Approach*. London: SAGE Publications.

Woolard, Kathryn A. (1998). Introduction — Language ideology as a field of inquiry. In: Schieffelin, Bambi B., Woolard, Kathryn A. and Kroskrity, Paul V. (eds.), *Language Ideologies — Practice and Theory*, pp. 3-47. NY/Oxford: Oxford University Press.

巖谷哲雄 (2017). 「営業で勝つビジネス敬語」真相社.

渡辺雅男 (1994). 『現代日本における階級格差とその固定化』「一橋大学研究年報 社会学研究」32, 47-153.

渡辺実 (1974). 「国語文法論」風間書院.

Wright, Richard L. and Hailu, Hailu Fullas (1988). Conceptualizing language as ideology. *Howard Journal of Communications*, 1 (4), 174-186.

武装する敬語（2）

—敬語イデオロギーと目下の応酬—

尾 鼻 靖 子

本稿では、敬語に対して社会が持つイデオロギーは必ずしもその信条通りに実行されているわけではなく、それを逆に利用することで下位者が上位者に対して応酬することも可能であるという点をドラマなどの対話を例に考察する。

言語イデオロギーとは、言語の様式、構造、語用などを一定の方向に正当化したり、合理化することによって、それが社会に普遍性を持って浸透し、また社会の人々の心に内在化する「信条」である。我々は日常自由に言語を操っていると思っているが、実は、我々の言語生活や言語行動は、多面にわたって言語イデオロギーによって方向づけられ、規制されている。言語イデオロギーは歴史的にも優勢なグループや国家の権力によってある一定の価値を決定づけられてきた。その価値は、社会で「力」となり「有利」「優勢」という信条を人々に植えつけられるようになる。

敬語も言語イデオロギーである (Brown, 2011; 小山, 2011; 渡辺, 1994)。過去においては、身分の上下を指標し、現代は社会的地位の上下や年齢差を指標する。過去においては身分が力を持ち、現代では教養や学歴が力あるいは価値を持つ。そしてその価値や力は敬語の世界と密接に関連している。敬語イデオロギーは社会に浸透しており、敬語を使うべき相手に使わない場合、なんらかの社会的制裁を受けることは覚悟しなければならない (渡辺, 1994: 63)。

しかしながら、イデオロギーというのは具体的な規則を載せたリストではなく、「社会の公約」(van Dijk, 1998: 314)として思想的に留まっているだけである。だから、イデオロギーを逆手に利用して、別の方略を考え出すことも可能である。本稿では敬語イデオロギーが下位者にとって必ずしも抑圧ではなく、敬語を駆使することで敬語を隠れ蓑として利用することで、上位者に対して挑戦したり、批判的態度を表したりすることが可能であることを論じる。まさに敬語が武装すると言えるであろう。